

北海道中央ユーラシア研究会第85回例会

2010年5月8日（土）16：00-18：10

（北海道大学スラブ研究センター4階小会議室401）

和崎聖日

「フェルガナ盆地における村落住民の自然・生活環境と行動様式：背景音の測定から」

（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・日本学術振興会特別研究員）

討論者：菊田悠（北海道大学スラブ研究センター・日本学術振興会特別研究員）

司会者：宇山智彦（北海道大学スラブ研究センター教授）

出席者数：12名

<報告要旨>

本報告は、ウズベキスタンにおける村落住民の自然・生活環境と行動様式とを、背景音の分析から、彼らの身体感覚にできる限り沿う形で明らかにすることを目的とする。このことを通して、人々が村の社会生活の中で自然と身に付けている推測や推論の形式を考察したい。ここでの「自然・生活環境」とは「個人あるいは社会によって音から知覚され、理解される、昆虫や動植物など自然と人間や乗物など人事とを含む周囲の状況」を指す。



「行動様式」とは「個人あるいは社会によって音から知覚され、理解される、時間と人々の日常行動との関連性」を意味する。さらに、ホーム・ステイ先のホヴリ(hovli：道に面した1つの門とそれに続く約60～200平方メートルほどの敷地からなる居住空間)の外から中へ自分が何も関わっていないにもかかわらず聞こえてくる音を、ここでは「背景音」と呼ぶ（この用語は人類学者・木村大治の「背景発話」概念から着想を得ている）。それは、バッタの鳴く音、犬の吠え声、ナインチンゲールや鶏、牛の鳴き声、ポプラの葉が揺れる音、自動車の走行音、家の改築作業の音、祝宴の音楽、赤ん坊の泣き声、子供の鼻歌、女性たちの喋り声など、さまざまな音と声である。ただし、ここで検討される生活の世界は夏の暑い時期という限定的な条件をもつ。

背景音の測定をめぐる方法論に関して、私は、ホヴリのある一定の場所に座り、耳に入ってくる音の頻度と形式をタイム・サンプリング法によって測定した。その方法は、15秒間に1秒のサンプリング枠を設け、その1秒の間に聞こえてきたすべての音の種類と、人間の場合は性・年齢層（子供／青年男女／大人の男女の5類型）を記録するというものである。1回のサンプリングでは、最短2分9秒～最長44分20秒間、測定した。サンプリン

グの総量は、1時間台ごとのサンプリング時間を3時間とし、2009年7月21日（火）から8月16日（日）にかけての（断食月ではない）期間の24時間分、つまり合計72時間と設定した。記録回数は合計17,280回である。また、1時間台ごとのサンプリング（各3時間）では、集団礼拝が行われる金曜日、そしてバザールが催され、村の多くの人々の仕事が休みである土曜日と日曜日を必ず含む6つ、あるいは7つの曜日ができるだけ均等に含まれることを条件とした。これらの音をその音量により差異化してポイント計算し、背景音の定量化を行った。

本報告の関心の所在を繰り返せば、以下の2点に収斂される。第1点は、フェルガナ盆地における村落住民がどのような自然・生活環境の条件のもとで毎日何をして過ごしているのか、これを彼らの身体感覚にできるだけ寄り添いながら、しかし斉一性の観点から把握することである。第2点は、ある音を聞いた村人がその音源を同定する過程とその音源同定後の発話の検討を通して、そこにみられる推測と推論の社会・文化的な拘束性を考察することである。このことは、フェルガナ盆地の村落住民がある物事（音）に際してどのような筋道で発想を展開させるかという人間の知覚の研究として意義があると考え、主題化している。

【記：和崎聖日】

<参加記>

本例会ではウズベキスタンをフィールドとする人類学者である菊田悠氏を討論者にお迎えした。まず、報告者の所属する京都大学は、人類学科において自然科学的な調査方法に長けており、本報告はそうした特色が十分発揮された分析方法であるとの評価が述べられた。

次に、全体の印象として、非常に手間をかけた調査方法であるが、そこから導かれる結論・結果の部分はまだ道半ばという印象を受ける。フィールドワークでの実感の確認にはなっているが、そこから先、どうやって研究につなげていくかが課題であるとの認識が示された。これに関連して、報告者の研究全体の中で、背景音の研究がどういう位置付けな



のかも問われた。また、「音を聞いている人」の分析が未着手であるとの指摘がなされた。音をどう知覚するかは人によって違い、ジェンダーや年齢のフィルターがどうかかっているのかといったことは社会文化的な拘束性を考察する上では極めて重要である。これに関して、雇用した調査助手3名の属性について質問がなされた。

その他、個別の質問・コメントとしては、これからの展望と関連して、気温・季節変化の影響を考察するとより面白くなるのではといった意見や、早朝日課・結婚式の宴の音が拾われているのは民族誌を書く上でも貴重なデータであろうという意見が述べられた。

菊田氏からのコメントに対し、和崎氏からは、自身の関心は「認知過程」「知覚」「推論形式」「連想の仕方」がいかに関社会文化的な拘束を受けるか、という問題にあり、社会文化的な性差にも関心があるとの回答があった。また、調査助手の属性については、助手①がホームステイ先の次女（35歳既婚女性）、助手②がその弟（25歳独身男性）、助手③が友人（28歳男性）であるとの補足説明があった。

報告者からの回答に続き、参加者を交えた質疑応答が行われた。そこで出された質問・コメントは大きく次の3つに要約できよう。

1) サンプルング調査の方法に関するものである。音をサンプルングする方法を用いた研究の発展性を感じるとのコメントが相次いだ。ただし、サンプルングの方法・場所については、工夫の余地があるのではないかという意見が複数寄せられた。報告者からは、ホヴリという居住空間を観測ポイントに選んだ一因として、通りにでてしまうと人々の関心を引き、調査が継続できないこと、また、ホヴリ内の生活音を排除したのは、家にいて外の音がどう聞こえるかということを当初意識していたためであることが説明された。

2) 「知覚された音」への着目の意義を評価するものである。環境社会学でも音の研究というのはあるが、そこでは音そのものが対象であり、知覚された音に注目したという点で興味深かったという意見が寄せられた。また、知覚された音にどこまで迫れるかという問題に関して、調査助手同士が同じ音を聞いて議論したりすることはあったのか、音を知覚するフィルターが地域全体で共通しているケースと、属性によって分かれるケースがあるのではないか、という意見があった。これに対し、報告者からは、今回の調査は基本的に報告者と調査助手で行ったが、場合によっては助手の近親者が同席していたこともあり、その場合、議論となるケースもあったことが紹介された。

3) 本報告で採られた調査方法からの結論と定性的な記述との差の少なさに関する指摘である。興味深い調査ではあるが、現時点では定性的な記述とあまり違いが出ていないため、性差や年齢差に注目したこれまでの報告者の研究と絡める方向性を志向すべきではないかという意見があった。一方、定量的な調査をしても、感覚的に分かることと結論があまり変わらないという問題は常に付きまとうが、本報告では調査助手たちの音の聞き方・とらえ方が新しい発見になっており、これは定量的な調査をやらないと聞けない情報である。数（データ）としてまとめられる部分と調査助手個々の言葉から言えることを整理していけば良いのでは、という提案も出された。

その他、調査地域における子供と女性の関係、居住環境の変化による、家宅内外の共有意識の変化の有無、本報告で用いられた音量評価（3段階）への疑問、調査者と生活者の違いについて、前者は後者より多くの音を聞いているのではなく、そこにある違いは学問的な分類体系を意識して聞き分けているか否かではないかといった意見や、調査に際し、金

曜日の集団礼拝やバザールの日を含むように注意したことによって分かったこととは何か、といった質問が寄せられた。

音をサンプリングして分析するという手法は参加者にとって馴染みのあるものではなかったが、一同非常に知的刺激を受けた様子であり、調査手法の改善や今後の調査・分析によって大きな発展が予感される報告であった。研究の進展を大いに期待したい。



[記： 立花優（北海道大学大学院文学研究科博士後期課程）]